

長野県のシダ植物雑記 (3)

大塚 孝一

K. Otsuka: Miscellaneous notes on Pteridophytes in Nagano Prefecture (3)

10. ハタジュクイノデ *Polystichum longifrons* × *P. tagawanum* (*P.* × *hatajukuense* Kurata)

本種はアイアスカイノデとイノデモドキの雑種と推定されるシダである。前者に比べ葉身の先がやや尾状に伸び、葉身下部のソーラスは小羽片基部耳片に優先的につく傾向があり、また、後者に比べ葉柄下部に暗褐色のリン片ができることから区別される。胞子不定形。

従来本県からは知られていなかったが、木曽山口村から採集された。当採集地はアイアスカイノデとイノデモドキが豊富に混生し、ツヤナシイノデとサイゴクイノデも多少あったので、あるいは、それらとの雑種の出現も期待される。タカオイノデ(ツヤナシイノデ×アイアスカイノデ)、オンガタイノデ(ツヤナシイノデ×サイゴクイノデ)、ハコネイノデ(アイアスカイノデ×サイゴクイノデ)は既に本県から知られている。ツヤナシイノデモドキ(ツヤナシイノデ×イノデモドキ)、キヨズミイノデ(イノデモドキ×サイゴクイノデ)は今後発見される可能性が高い。

〔採集記録〕 木曽山口村黍生(大塚, 1985, 10, 6 SHIN)。



写真6 ハタジュクイノデ

11. フナコシイノデ *Polystichum* × *inadae* Kurata

本種はイノデとサカゲイノデの雑種と推定されるシダである。本県では飯山市小菅から提久氏により採集されている。当地からイノデは見いだされていないが、新潟県には知られているので、今後発見される可能性は高い。

本県におけるイノデの分布は、今のところ木曽南部と下伊那南部に限られ、稀である。サカゲイノデは全県に分布するが、北信に片寄る傾向があり、佐久地方や下伊那南部ではほとんど見られない。この様な両種の分布から見て、フナコシイノデはそれほど多いとは思われないが、下記の標本が本雑種と判断されるので報告する。なお、天竜村産の標本は現地の状況からイノデとツヤナシイノデの雑種と考えられるものであるが、本雑種として一括する。

〔採集記録〕 下伊那阿南町深見(提久, 1982, 8, 29, SHIN), 天竜村中井侍(大塚, 1985, 11, 3, SHIN)。

12. フモトシケシダ *Lunathyrium pseudo-* *conilii* Serizawa

本種はホソバシケシダによく似たシダで、最下羽片が顕著に大きいこと、胞膜に多少毛があること、葉柄はやや硬く紫褐色を帯びることなどで区別される。現在までに、下伊那南部(天竜村, 泰阜村)と軽井沢からごく稀に知られていたが、今回木曽谷及び飯田市から採集された。自生地はスギやヒノキの林床で量的には少ない。

〔採集記録〕 木曽大桑村野尻(大塚, 1985, 10, 10, SHIN), 飯田市座光寺(大塚, 1985, 11, 4, SHIN)。

13. セイタカシケシダ *Lunathyrium lasio-* *pteris* (Kunze) Nakaike

本種は暖地性のシケシダ類で、本県からは下伊那(天竜村, 根羽村)と木曽(山口村)から知られている。

信大標本庫(SHIN)に、埴科郡戸倉町で採集された標本で、ミヤマシケシダとされたものの中に本種があった。興味深い記録であるので報告したい。当地域は県の内陸部であり、暖地性シダの出現はあまり期待できないが、県内では下伊那と木曽南部に次いで暖かい地域と考えられる。今回の例のように、

木曽南部あるいは下伊那南部に分布する暖地性のシダが、それらの地域から飛び離れて戸倉町周辺に分布している例としては、ホソバイヌワラビ(更埴市)、サイゴクイノデ(更埴市)、イノデモドキ(坂城町)などがあり、興味深い。これらの分布を許す微気候的な要因があるのであろう。

〔採集記録〕埴科郡戸倉町樽沢(分類ゼミ, 1985, 8, 25, SHIN), 飯田市座光寺(大塚, 1985, 11, 4, SHIN)。

14. コセイトカシケシダ *Lunathyrium conilii* × *L. lasiopteris*

本種はホソバシケシダとセイトカシケシダの雑種と推定されるシダである。前者に比べ葉は大形で、微毛が多く、後者に比べ葉は小形で幅広くない。胞子は不定形。

本県からは従来知られていなかったが、今回、飯田市の両種混生地で採集した。セイトカシケシダについても、既知の産地は木曽山口村と下伊那天竜村、根羽村であった。当地にはフモトシケシダもあり、フモトシケシダ×セイトカシケシダと思われるシダも採集している。

〔採集記録〕飯田市座光寺(大塚, 1985, 11, 4, SHIN)。

15. イヌイワガネソウ *Coniogramme* × *fauriei* Hieron.

本種はイワガネソウとイワガネゼンマイの雑種と推定されるシダである。前者は葉が厚く、羽片の側脈は結合して網目をつくるが、後者は側脈が遊離して網目をつくらない。この雑種は部分的に脈が結合し、葉の質も後者よりは厚い。イワガネソウは暖地

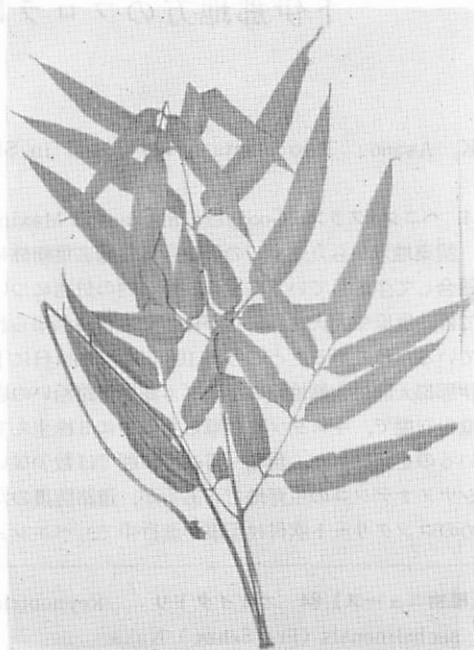


写真7 イヌイワガネソウ(大桑村産)

性のシダで、下伊那南部、木曽南部、下高井に稀に自生するが、イワガネゼンマイは県内に広く分布する。本雑種は従来、下伊那にあったが木曽から採集された。

大桑村野尻産の標本は葉の裏面に微毛を密生する一型で、イワガネソウ×ウラゲイワガネと考えられるものである。

〔採集記録〕木曽三岳村橋渡(大塚, 1983, 11, 6, TNS), 大桑村野尻(大塚, 1985, 10, 10, SHIN)。

〔新刊紹介〕柴田 治 「高地植物学」A 5 判

308頁, 内田老鶴園, 1985年8月。5,800円。

長野県は高山に囲まれており、そこに生育する植物種が豊かである。それゆえ、植物が高地にいかにして適応し生活しているのかを研究してゆく上でも恵まれた立地条件にあると言える。著者は長年にわたって信州の山々を踏査し、またそこに生育している植物の研究を生理学的な側面から行ってきた。本書はそれらの研究結果をもとに書かれたものであり、山岳植物の生理生化学的研究および遺伝学的研究が数多くの文献をもとにしてまとめられている。本書は5章からなっており、内容は次のとおりである。I 高地植物学, II 高地的環境, III 高度帯と植生, IV 高地的環境と植物の機能, V 北半球の高度帯植物要素の起源と分化。

本書は植物が高地環境にいかにして適応しつつ生

活しているのかについて知るための絶好の入門書であり、また文献についてもよく整理されているので是非一読をお勧めしたい。(吉玉)

〔新刊紹介〕和田 清「校章の自然誌」B 6 判

286頁, 信濃毎日新聞社, 1985年6月。1,200円。

地域に根ざした本とはこのような本のことを言うのかもしれない。あまりに身近にありすぎて気にもとめなかった校章の中にも、その県に根ざす自然の息吹きや、人々の願いがこめられていることをこの本は教えてくれる。この本はページをめくってゆく程に楽しくなる本である。この本を読みつつ、もう一度机の奥深くにねむっている(?)若き日の勲章であった校章を取り出してながめてみてはいかが。

(吉玉)